「医」「農」連携を

育種学会 AMDAと公開シンポ

岡山・早島

食物や畜産などの品種改良を行う研究者でつくる日本育種学会（事務局・東京）による公開シンポジウム「人々の『幸せ』と『食糧』―農業と医療における国際協力」（AMDA共催、文部省後援）が二十三日、岡山県早島町前潟のゆるびの舎で行われ、訪れた農業関係者や主婦、学生ら約百人が専門家の講演に熱心に聞き入った。

石弘之・東京大教授（国際環境社会学）、菅波茂・AMDA代表、河野和男・神戸大教授、藤巻宏・東京農大教授（国際農業開発学）が講演した。この中で菅波代表は、海外協力の経験を基に医療と食糧の根源的なつながりを説明。「栄養失調はすべての病気の原因となるが、医療だけでは解決できない。食糧確保のための農業技術が大切であり、医療と農業の連携がこれからの大きな課題だ」と話した。

岡山大資源生物科学研究所の武田和義教授（大麦野生植物）をコーディネーターにした討論では、「地球温暖化に向けて作物の品種改良は始まっているのか」「日本には金があるから食糧不足より食物の安全性の方が切実では」などと会場から鋭い質問が飛んだ。

農業分野と医療分野の合同シンポジウムは、同学会が岡山市に本部を置くAMDAに呼び掛け、初めて企画した。二十五、二十六日は、岡山市津島中の岡山大で学会本大会が開かれる。

農業と医療における国際協力をテーマに開かれたシンポジウム＝岡山県早島町・ゆるびの舎